プログラム名	タイにおける地域振興を考える多言語フィールドワーク
協定校名	コンケン大学
研修期間	令和 8 年 8 月 23 日～令和 8 年 9 月 3 日
参加人数	12 名
実施責任者	外国語学部 国際英語学科　津村 文彦

8 月 23 日より 9 月 3 日まで、タイ（コンケン、アユタヤ、バンコク）海外研修「タイにおける地域振興を考える多言語フィールドワーク」を実施し、外国語学部学生 12 名（4 年 10 名、3 年 2 名）が参加した。本研修は外国語学部 3 年の選択科目「国際フィールドワーク II（非英語圏）」に関連する。

8 月 24 日より 28 日の 5 日間はコンケン大学人文社会学部にて、午前中はタイ語の授業を受け、午後は同学部学生とディスカッションや交流イベントを実施した。授業では簡単なタイ文字の学習、タイ語の簡単なフレーズの学習を行い、金曜日にテストを実施した。交流では、同学部 1 年生に書道を教えたり、乾燥うどんと出汁を使ってうどんを作って現地の学生に振る舞ったりした。ディスカッションでは、日本で準備してきた、タイと日本の魅力を掛け合わせた新しいビジネスアイディアをめぐって、チームごとにディスカッションを行った。最終日には、コンケン大学生 40 名を学生投資家に見立て英語でビジネスピッチを行った。その後、プログラムの修了式が行われ、副学部長より全員に修了証が手渡された。

29 日、30 日はコンケン県ムアン郡シーラー村にて村落滞在を行った。食事作り、お菓子作りや田植えなどの村落生活を体験するとともに、朝の托鉢にも参加した。8 月 31 日にバンコクに移動して、9 月 1 日はアユタヤの世界遺産、アユタヤ歴史公園を見学し、学生それぞれが担当する遺跡のガイドを行った。9 月 2 日にはタイ国政府観光庁バンコク本庁にて「日本とタイを掛け合わせたビジネスアイディア」についてプレゼンテーションを実施し、東北タイの絞り染めのマットミーの衣料品アップサイクルのアイディアが最高の評価を得た。この発表は、観光庁大阪事務所とも Zoom で繋いで行った。

今回は 7 回目の実施で、4 年生学生が多く参加していたが、いずれも例年に劣らず積極的に学修活動に参加して、東北タイとバンコクでの滞在を通じて世界観を揺るがすような研修になったと感じられた。





プログラム名	感性工学の共同研究によるグローバルエンジニア育成
協定校名	ラジャマンガラ工科大学タニヤブリ校
研修期間	令和 8 年 7 月 16 日～令和 8 年 8 月 20 日
参加人数	3 名
実施責任者	情報工学部　川澄未来子

学生 3 名が研究/実験目的で 36 日間滞在し、2 つのフェーズに分けて活動した。

7/16（木）-8/7（水）研究活動

・青山（M1）：スイレンの花弁に対する知覚的代表色の計測

・安藤（M1）：肘関節可動域が拡大されたアバタの外見が身体所有感に与える影響

・高橋（B4）：味覚語に対する連想色の調査と分析

8/7（金）-20（木）学生交流・企業視察活動

・タイ大学 RMUTT 学長挨拶，名城オフィス訪問，学生交流，キャンパス見学

・タイローカル企業（BGPU、Customs United、Mercy Centre）視察

・タイ日系企業（TT FTS、豊田合成アジア）視察

・シンガポール 大学 NUS，SIT（Punggol Digital District）訪問と学生交流

・シンガポール 起業家や投資家や留学生による講演受講

・シンガポール 社会課題視察（Marina Barrage、Harmony in Singapore Gallery）







プログラム名	国際社会で活躍する ICT エンジニア育成研修
協定校名	ラジャマンガラ工科大学タニヤブリ校
研修期間	令和 8 年 8 月 7 日～令和 8 年 8 月 20 日
参加人数	7 名
実施責任者	情報工学部　川澄未来子

前半はタイにて本学の海外協定校であるラジャマンガラ工科大学タニヤブリ校（以下 RMUTT）キャンパス内のホテルに滞在しながらタイの同世代学生たちと交流し、現地講義の参加や実習を体験するとともに、日系企業の海外拠点やローカル企業を訪問した。後半はシンガポールにてアントレプレナーシップ教育を中心に実施した。

8/7（金）-20（木）学生交流・企業視察活動

・タイ大学 RMUTT 学長挨拶，名城オフィス訪問，学生交流，キャンパス見学
・タイローカル企業（BGPU、Customs United、Mercy Centre）視察
・タイ日系企業（TT FTS、豊田合成アジア）視察
・シンガポール 大学 NUS，SIT（Punggol Digital District）訪問と学生交流
・シンガポール 起業家や投資家や留学生による講演受講
・シンガポール 社会課題視察（Marina Barrage、Harmony in Singapore Gallery）









プログラム名	海外研修　マレーシア・シンガポール
協定校名	マレーシア・マラヤ大学、シンガポール・シンガポール国立大学
研修期間	令和 8 年 8 月 4 日～令和 8 年 8 月 10 日
参加人数	28 名
実施責任者	経済学部　佐土井有里

ASEAN(シンガポール・マレーシア)の現状と発展経緯を、直接現地でのフィールドワークを通して考えることを目的とする研修を経済学部で以下の通り実施した。多民族国家であるマレーシアとシンガポールを訪問し、多民族国家の成り立ち、政治・政策、経済発展の経緯、等を事前に学び、現地訪問を通して、現地の経済活動や企業活動の現状を学生たち自らが体感し、日本とマレーシア・シンガポールとのつながりと今後の課題を真剣に考える機会を与えることができたと考える。
また、現地大学訪問により、マラヤ大学、シンガポール国立大学の学生と直接討議・交流することにより、多様性を知り、チャレンジ精神を養い、優秀なマレーシアやシンガポールの学生から多くを学び、刺激を受け、今後の学生たちの考え方に強い影響を与えたと感じる。

１．概要

本科目は経済学部 佐土井が担当し、４～７月の講義期間においては、マレーシア・シンガポールの歴史、経済を概観するといった座学と受講学生による現地での英語プレゼンテーションの作成、練習などの期間を経てフィールドワーク活動に臨んだ。

以下の４つを活動軸として、2026 年 8 月 4 日（火）～8 月 10 日（月）にかけて海外活動を展開した。

① 海外現地との交流を通じて国際的視野を磨き、自分の世界観を広げる
② 経済・産業関連施設を視察・調査し、経済のグローバル化の理解を深める
③ 現地の文化と接することにより、多様な価値観を尊重するマインドを育てる
④ 英語力のレベルアップとコミュニケーション力をつける

今回が初めての海外という学生も多く、ほとんどの学生が慣れない入国審査や現地交通機関利用にも戸惑いをみせていたが、日に日に現地に溶け込み、滞在先でも自分たちの視点で、訪問前に想像していた以上に発展している ASEAN の都市を眺め、産業

のあり方を考える、そして現地の暮らしを垣間見るといったことに慣れていく姿が印象的だった。加えて経験を重ねるごとに英語「耳」を強化していく様子は、教員からも頼もしく感じた次第である。

２．マレーシア・マラヤ大学 University Malaya における学生間交流

マラヤ大学はマレーシアのトップ国立大学である。広大なキャンパスをクアラルンプールに持ち、学内はバスか車での移動が必要である。マラヤ大学と名城大学は学術協定を 10 年以上前に結び、その時の教授 Prof. Fartima Kari も退官後にもかかわらず参加していただいた。現経済経営学部長や教授、研究者、大学院生が 10 名参加していただき、マラヤ大学の学部生も 10 名ほど参加した。

名城大学学生 28 名は 5 つのグループに分かれ、以下の 5 テーマで発表した。

表：学部生らによるプレゼンテーションタイトル

1. Connect senior and students: Volunteering connects care and career
2. Food waste reduction project
3. Asian Games x Job hunting networking event
4. Connecting Islands, People and Nature: a remote island coexistence SAKUSHIMA-Nexus
5. Rebuilding foreign workers' careers for a sustainable manufacturing Industries

発表と質疑応答後、大学の学生たちが学内ツアーを用意してくれた。プレゼンテーションとグループによるキャンパスツアーの後には、マラヤ大学が用意してくれたマレー料理のランチをグループごとにテーブルに分かれ、互いに英語と日本語を交えた交流の場を持てた。

３．マレーシア調査

クアラルンプール市内、プトラジャヤ（行政都市）市内、サイバージャヤ（ＩＴ産業集積都市）市内の訪問見学により、マレーシアの歴史、宗教（イスラム教、ヒンズー教、仏教)、産業の発展経緯のわかる個所を回り、現地ガイドと、佐土井（マレーシア専門）が解説し、現地にて体感する機会を持った。

４．シンガポール国立大学での学生ワークショップ

シンガポール国立大学では、名城大学の 5 チーム毎に分かれ、シンガポール大学の学生に対してテーブルを囲む形でのグループプレゼンテーションと質疑応答を行った。

ワークショップ後では、学内を見学し、その後規模の大きなカフェテリアで現地学生を囲み、現地の料理を共に楽しみ、その後、ベイフロントに全員で移動し、光のショーを共に楽しんだ。

以上、概要報告である。語学の壁や長期にわたる大人数での行動、慣れない環境下での生活など一歩踏み出すまでを躊躇した学生や体力的に不調になった学生もいた。そのなかで、受講者たちが大きな満足感を得たこと自体が本講義の大きな成果である。今年度の受講者は２，３年次の学生たちで、これから迎える就職活動、そして残り少ない大学生活と今後の過ごし方は様々である。残りの学生生活のなかで、これからの科目受講に際する姿勢や語学力の向上、資格試験への挑戦など色々な思いを彼らは抱いているだろう。それらに今回得た体験を反映できれば教員としても嬉しい。

最後に、帰国後に受講者が提出したレポートから、「国の発展過程を２つの国で比較しながら体感できたことは大きな学びになった。」「マレーシア・シンガポール研修によって新しい知識や価値観を知ることができ、さらに将来のビジョンの候補が増えた」、「実際に行って現地の学生と話し、目で見て話を聞いてその場の空気を感じたことは、何にも代え難い経験となった。」経済学部生が積極的に海外研修を受講できる環境を我々教員も整えていきたい。

プログラム名	法学部国際専門研修プログラム（ハワイ海外司法研修）
協定校名	ハワイ大学ウィリアム・S・リチャードソン・ロースクール（法科大学院）
研修期間	令和 8 年 9 月 2 日～令和 8 年 9月 9 日
参加人数	14 名
実施責任者	法学部　柳澤武教授　藥袋佳祐准教授

法学部ハワイ海外司法研修は、米国ハワイ州の法制度を学び、日本法との比較考察を行うことを主要な目的としている。2026 年度は、14 名の学生が参加し、2 名の教員が引率を担当した。

学内での事前研修においては、ハワイ州の基本情報の確認、アメリカ不法行為法の基礎知識の学習、グローバルプラザとの連携に基づく入国審査時の英会話の練習を実施した。

ハワイ現地での主な研修内容は、①法律事務所におけるハワイ州弁護士によるレクチャーの受講、②ハワイ日本文化センターにおける日系移民の歴史の学習、③ハワイ大学ロースクールにおける特別講義「アメリカ法入門」（Chen 教授）の受講、ネイティブ・ハワイアンに関する訴訟についてのセミナーへの参加、講義「不法行為法」（Kauanoe 助教）の聴講、④ハワイ州最高裁判所および併設資料館への訪問、⑤イオラニ宮殿におけるハワイ王政の変遷・歴史の学習、⑥パールハーバーにおける太平洋戦争の歴史の学習、⑦ブリガムヤング大学ハワイ校附設ポリネシア・カルチャー・センターにおけるポリネシア地域内各国の文化等の学習であった。

帰国後のレポート課題を通じ、学生における日米の法制度を比較する視座の獲得を確認した。

①アラモアナ・リーガルエイド・ソサイエティ法律事務所における Messersmith 弁護士によるレクチャー





②ハワイ日本文化センター





③ハワイ大学ロースクール









④ハワイ州最高裁判所および併設資料館





⑤イオラニ宮殿





⑥パールハーバー









⑦ブリガムヤング大学ハワイ校附設ポリネシア・カルチャー・センター





プログラム名	協定校中国三峡大学を核としたグローバル化
協定校名	中国三峡大学
研修期間	令和 8 年 8 月 30 日～令和 8 年 9 月 4 日
参加人数	15 名
実施責任者	農学部　農学研究科　田村廣人







プログラム名	プラズマ研究に基づくグローバル研究者養成プログラム
協定校名	国立台湾科技大学
研修期間	令和 8 年 8 月 1 日～令和 8 年 9 月 10 日
参加人数	1 名
実施責任者	理工学研究科電気電子工学専攻　太田　貴之

国立台湾科技大学化学工学科の Wang 教授の研究室に大学院生 1 名を派遣し、プラズマを用いた機能性薄膜に関する研究・実験活動を通して、グローバルに活躍できる高度な専門知識・技能を有する技術者・研究者を養成することを目指した。プラズマを用いた材料プロセスは LSI などの半導体デバイス製造の根幹を技術であり、本研修では医療用ハサミの腐食を防ぐために、プラズマ励起化学的気相堆積法を用いた炭素膜コーティングの実験を行った。結果や考察について、日台教授を含めた討論会（WEB 会議を含める）を 3 回行った。

国立台湾科技大学の留学生専用宿泊施設（4 人部屋）に宿泊し、Wang 研究室以外の外国学生とも交流を行った。

本研究成果のアウトプットとして、論文執筆を進めている状況である。

プログラム名	チュラロンコン大学理学部との学術交流
協定校名	チュラロンコン大学
研修期間	令和 8 年 9 月 12 日～令和 8 年 9 月 16 日
参加人数	3 名
実施責任者	総合学術研究科　景山伯春

名城大学からは教員 1 名および大学院生 3 名の計 4 名が参加し、チュラロンコン大学理学部微生物学科の Rungaroon Waditee-Sirisattha 教授の研究室を訪問した。訪問中は、シアノバクテリアが産生する天然の紫外線吸収物質を用いた共同研究に関する詳細な議論を行うとともに、関連する研究設備および施設の視察を実施した。
また、フィールドワークとしてアユタヤ県において、高温・高日照環境に生息するシアノバクテリアのサンプリングを行った。今後、チュラロンコン大学においてこれらのサンプルからシアノバクテリアの単離を試み、成功すれば共同研究の対象とする予定である。
研修期間中、双方の大学院生は活発な交流を行い、名城大学側の学生にとっては、英語で自身の研究内容を海外の研究者に説明する貴重な機会となった。また、短期間ではあったが、タイの文化や研究環境に直接触れることができ、国際的な視野を広げる大きな経験となった。







プログラム名	アジア先端産業クラスター研究フィールドワーク：
協定校名	国際フィールドワーク（韓国）
研修期間	令和 8 年 9 月 6 日～令和 8 年 9 月 11 日
参加人数	16 名
実施責任者	経済学部

研修には経済学部の学生 16 名が参加した。事前研修では、東国大学校との共同セミナーに向け、各グループの報告テーマについて調査・検討を進め、発表内容の整理と報告用 PowerPoint 資料の作成・準備を行った。

東国大学校では、双方の学生が研究発表と質疑応答を行った。本学の学生は人口減少・少子高齢化や脱炭素に関する日韓の共通課題と相違点を発表した。東国大学校側のサプライチェーン再編、地政学的リスクと株価の関係に関する発表から、経済活動を効率性と安全保障の両面から考える視点を学んだ。研修全体では、釜山港湾公社や朝鮮通信使歴史館、非武装地帯（DMZ）等を訪問し、国際物流、日韓交流の歴史、朝鮮半島の分断への理解を深めた。東国大学校の学生との食事や市内散策では、大学生活や共通の関心について語り合い、交流を深めた。

事後研修は、帰国翌日の令和 8 年 9 月 12 日に実施し、学生に研修報告書の作成とセミナー内容の振り返りを求めた。特に、東国大学校との共同セミナーを独立した項目として 1 ページ程度を割き、発表・質疑応答の内容、感想、学んだことを具体的に記述するよう指示した。提出された報告書を通じて、日韓の経済・社会への理解や異文化交流を通じた学び、今後の学習課題を確認した。


Welcome to
Busan


세만금의
미래를 그리다





プログラム名	アジア先端産業クラスター研究フィールドワーク：②国際フィールドワーク（台湾・シンガポール）
協定校名	台中科技大学、銘伝大学、真理大学
研修期間	令和 8 年 9 月 1 日～令和 8 年 9月 12 日
参加人数	19 名
実施責任者	経済学部　太田志乃

令和 8 年 7 月 1 日に、2026 年度経済学部国際フィールドワーク（台湾・シンガポール）の参加学生を対象として、事前オリエンテーションを実施した。
今回の研修では、9 月 3 日・4 日に国立台中科技大学、9 月 7 日に銘伝大学、9 月 8 日に真理大学を訪問し、現地学生とのグループワーク、交流、地域調査を行うことを説明した。見学に留まらず、同世代の学生と直接話し、大学生活や就職、文化、生活習慣などについて意見を交わすことで、日本との違いや共通点を自分自身で見つけることを研修の目的とした。
また、交流に向けて参加者をグループに分け、本学での学びや学生生活について、もしくは日台企業、産業の相違点等を発表するための準備を行った。その際、日本では当然とされることでも、海外の学生には説明が必要になること、相手からの質問に自分の言葉で答えることが大切であると伝えた。重ねて、現地公的機関や企業等への訪問では、説明を聞くだけで終わらせず、大学交流や街の観察で得た気づきと結びつけて考えるよう指導した。あわせて、12 日間の行程や行動、集合時間、貴重品管理、体調不良時の対応、緊急連絡方法について確認した。帰国後は、現地で見聞きした事実と自分の意見を区別し、研修を通じて生じた問いをレポートにまとるよう指導、12 月に成果発表会を実施することを周知した。







プログラム名	循環経済ビジョン 2020 に基づくカーボンリサイクルコンクリート技術のアジア（韓国）への展開、第 17 回日韓建築材料施工シンポジウム参加
協定校名	韓国国立忠南大学校（CNU）
研修期間	令和 8 年 8 月 27 日～令和 8 年 9 月 6 日
参加人数	6 名
実施責任者	理工学研究科環境創造工学専攻　道正　泰弘　教授

理工学研究科環境創造工学専攻の大学院生 6 名を派遣し、本学協定校である韓国国立忠南大学校建築工学科での海外研修および韓国国立公州大学校での第 17 回韓国・日本建築材料施工ジョイントシンポジウムに参加した。昨年度に続き、有意義な国際交流ができ、学生にとっても貴重な経験を積むことができた。

海外研修としては、8 月 27 日～9 月 3 日に「フライアッシュのコンクリートへの外割利用に関する共同研究」を実施した。

シンポジウムは、9 月 3 日～9 月 5 日に開催され、道正教授が基調講演「環境負荷を低減する最適な建築材料・施工方法の評価と適用に関する一連の研究」を行った。また、大学院生 6 名（岩野さん、小野山さん、位田さん、岡田さん、チャンティさん、山﨑さん）が学生講演の部で発表を行い、位田さんが KIM MOOHAN AWARD（学生優秀論文賞）を受賞した。

なお、詳細は名城大学ニュース（https://www.meijo-u.ac.jp/news/detail_33813.html）を参照。